

414
A2747
1



木村真三郎捺印相拒事件
手續
八月廿日午前九時出庭主任官三村

大正十一年四月
限五
候時郵寄贈

一 自分共義素野禮行ヨリ藤田組ニ兼而實
造紙幣有之由ニ而探偵依頼ヲ受候始末
警視第三課ニ而上申及進呈セシ書面ニ通
相違有之云々
木村真三郎
石原 巖
藤田 典從



一兼而禮行ヨリ受取ル約定証ヲ當初金十
圓可相渡ト記載セシニ後日ニ到リ三千圓ト記
入致候事
一添書一札奥書宛烟久三郎記名ハ全ク禮行ノ
自筆ト奉存候事

宿所

各自姓名

一真三郎ハ右口供中警視三課ノ上申以下ノ文
意、拒ミ捺印セサリキ
但後ケニヤ糸別ニ一名、而捺印ス

一石原勝田ハ右口供、無異議捺印ス

捺印拒ミ付主任官問答

判事曰何故、今日ニ到リ口供、捺印出来ヤ
ヤ

真曰今回ノ一件、付テハ大体上相違ノ廉有
ク係而ナリ尤モ今日ノ場合ニハ到ラザル答
ナリ深ク注意アリ

判事曰然ラハ今日ヨリ拘留ミテ將又其方ハ性
質彼我、轉輾スル風アリ素ヨリ此口供、捺
印スル所分有無ニ掛念ハ更ニ強シ強テ
捺印ス可シ

真曰素ヨリ御拘留ハ覺悟ニ有ク御拘留ニ上
緩之上申致度義モ有ク是ハ石原勝田
ヲ御退被下候ハ捺印ノ出来ザル端緒上
申スト

判事曰今ニ至リ右兩人ヲ退ケストモ上申スベシ以下

吟味暫時相所ニ而相待リベシト

其後呼出シヌナク遂ニ午砲ニ而役所退出ノ
時間ニ至リ御用ノ筋ハ追テ尋問ニ及ハルニ付
一先帰宅スヘキ旨ニ而出門札情取帰宅ス
右ノ次第ニ而本日ハ致方無ク其得共明日再々
出頭ニ上實情上申シ上公平ノ裁判ヲ可仰

心底ニ御座候就テハ從來毎々申上候得共無
御見捨御舎被成下候而迂奴ノ本懐相立申
候場合ニ到リ候様一層御配慮ニ段偏ニ奉
願候早々已上

八月廿日午后

本村真三郎

114
A2747
2

朱
明治十三年八月廿一日 本村真三郎申立之趣
意

大隈侯爵邸寄附
十一月四日

判事曰今日予何ノ為、出頭セシヤ

真 昨日上申ノ續キ則今回自首ノ不正ニ

出テ夕人トシテ事實具申可致候為、出
頭

抑モ今回、自首タシテ昨幸十二月中旬ノ
頃御拘留中贋札一件ノ事ハ長ニ助陽
ニヨリ柔ラシク昔日借梅印スベキトノ事
ナレバ元来右様無根ノ事ヲ上申セシ

ニ付堅ク拒ミタリ
犬塚檢事萩二等警視補曰ク然レハ今
際ハ不容易風説ニモ及ビ居リ貴格ヲ
少ク處分セサレハ政府ノ御都合モ有之
事故貴格ノ一身上ハ御處分後取立テ
遣スヘキニ付縷々御諭ニ任セ伏刑セリ
放免後右御方ニ仰取立テ願出タリ然レ
萩曰此件ニ付江湖ニテモ不穩就中九
州表ニ於テ島津久光等藤田組事件ニ
付伺テ義有之上京スハトノ舉動有之
越久雷米警察ヨリ飛報アリ高以警

視ニ於テ焦眉ノ場合至ルニ付貴格ヨリ一
書呈上致ヘク云々手續上申セシ

判事曰今更左様ノ言ヲ陳述シテハ甚タ困却ス
夫レ等ノ事ハ言フニタラス下保衣ニ助陽
ニヨリ承ハリタム札ノ事ハ如何

真
全ク承リタムハ相違無クナリ然レハ最
初自首差出セシ折河原崎少警部却
下セシモ後チ永澤一等警視補等ノ御注
文ヲ受ケ將ホ萩、共旨照會ノ上陽ニ衣
ニ助ヨリ承リタムハ事實虚言ト認ナリ
判事曰然レモ今際ノ自首ハ貴格ナリニ無ク石原

巖モ同時ニ自首セリト
真事 吾等石原ハ萩ト自分ト相談ニ上味方ハ
取入レ而レテ自首ヲセシメタリ依テ同時ニ
無クニ自首日付ヲ参照セラハルベシ
判事黙々タリ今更左様ニ事ヲ申サ
スト退散ス可シ云々